教職員情報

2004年8月

▲写真1：ネジバナ

理学部附属 植物園のいきものたち

第15回

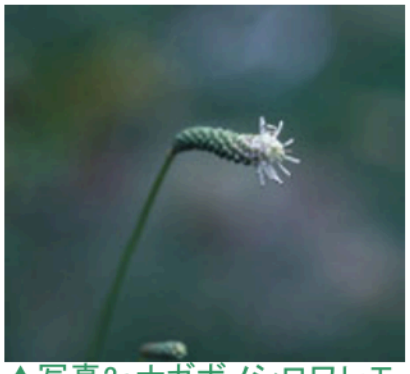
前回は湿った林床の植物を紹介しましたが、京大植物園の環境が様々であることを知っていただこうと、今月は明るい草原の植物を紹介します。

写真1（上）：ネジバナ

ラン科きっての「雑草」、つまり人が何もしなくても身の回りで生長し繁殖するランの仲間です。「雑草」というだけあって、今出川通り沿いや学校の校庭などでもでもよく探せば見つけることができます。

花が花茎（花の咲く茎）にねじれて巻き付くように咲くことからネジバナですが、「もぢずり」という異名も持ちます。以前は「もぢずり」がこの植物の標準和名とされていたこともあったようですが、こちらのほうが趣があるから好きだ、というかたも多いかもしれません。みちのくの　しのぶもぢずり　誰ゆゑに　乱れそめにし　われならなくに

これは百人一首にもおさめられた有名な歌ですが、信夫の里（現在の福島市付近）のもぢ摺り染めの模様に読み手が自分の心境をなぞらえたものです。もぢずりの名はこのネジバナの花茎をもぢ摺り染めの模様になぞらえたことによるわけですが、私はもぢ摺り染めの実物を見たことがないので、実はピンと来ていません。



▲写真2：ナガボノシロワレモコウ

写真2（下）：ナガボノシロワレモコウ

この仲間はみな草原性の植物とされ、高い山の「お花畑」でトウチソウの仲間がみられ、平地ではワレモコウという種が田のあぜ道などにみられます。最近はワレモコウやオランダワレモコウなどが切り花として売られているのも見かけます。

ナガボノシロワレモコウは、国内では北海道に多くみられますが、京都府南部の里山でも数年前までは見ることができたようです。幹線道路建設などの影響で現状は不明ですが、草原性の植物がその生息地を失うという現象は日本のいたるところにあるようで、ワレモコウの咲く水田地帯に第二名神が作られていく、ということも今つぶさに見ることができます。

写真のナガボノシロワレモコウは京大理学部の教官が中国東北部より持ち帰り、植木鉢で育てられていたもののようですが、1999年度に残念ながら廃棄処分となってしまい、現在は植物園でこの花を見ることはできません。

（写真、解説：今村彰生）

7月21日、12時20分から理学部附属植物園の3ヶ月ぶりでの観察会が行われ23名の参加がありました。 7月21日は土用の丑の日で暦（二十四節気）が大暑となる前日（小暑の最後）でしたが、まさに真夏を感じる日でした。 夏の日に植物がどんな状態でいるのかについて我々は意外なほど無頓着だ、という前提に立ち、花の春と実りの秋にはさまれた夏とはどんな季節であるかを感じる日になりました。 出会った植物は、ヤブミョウガ、ウバユリ、ヤマコンニャク（結実中）、イヌビワ（結実中）、ヤマブキ（狂い咲き）、オニユリ、オオハンゲ（開花、結実中）、ハンゲショウ（結実？中）、ツユクサ、ムラサキツユクサ、ミゾカクシ、シロネ、ミソハギ、アオギリ（結実中）、エンジュなどです。

湿度の高い場所に咲く花や、水辺に咲く花がとても多いことがわかっていただけると思います。北海道などを除けば、高温多湿こそ日本の夏でしょうが、意外なほど実りの時季を迎える植物が多いと思います。植物たちの夏のすがたを体験できた観察会でした。